

ももしきの

大宮人の 退り出で

あそぶ今夜の 月の清けさ

作者未詳 巻七・一〇七六

すっかり秋らしい気候になり、万葉文化館から帰宅する際には、虫たちの大合唱が楽しめるようになりました。

今日10月4日は、「中秋の名月」です。「中秋の名月」とは、旧暦の8月15日の夜の月のことをいいます。ただし、今夜の月はいわゆる満月ではありません。旧暦とは月の満ち

欠けを基にした暦なので、新月が1日、15日に満月となりそうなのですが、しばしばずれるようです。

天文学的な意味での満月とは、地球から見て月と太陽が反対方向になった瞬間、つまり月が太陽の光を真正面から受けて、地球からまんまるに見える瞬間の月のことを指します。月はおおよそ29・

やまと 万葉がたり

5日の周期で満ち欠けを繰り返しますが、地球の周りを楕円形の軌道でまわっているため、その半分の14・75日です。必ずまんまるに見えるようになるわけではないのだそうです。今回は10月6日が満月となります。

「中秋の名月」を愛でる風習は、平安時代に中国から伝わったと

いわれます。ただ、奈良時代の人々も、美しい月を愛でる習慣はあったようです。

「万葉集」には月を詠む歌が数多くみられます。月の光をたよりに恋人のもとへ通うことが表現された恋の歌(巻四・六七〇)や、二人が遠く離れた場所

【訳】宮中の大宮人たちが退出しては、飲を尽くす今夜の月の、清らかなことよ。

でしようが、月光の下にいても見上げる月は

同じ、という思いなども詠まれています(巻十八・四〇七三)。夜ごとに満ち欠けを繰り返す様子から、不老不死の仙薬が月にあるという中国の伝説も伝わり(巻十三・三二四五)、仏教的な無常観とも結びついたようです(巻三・四四二)。

さて、あなたは月を見て何を思いますか？(県立万葉文化館指導 研究員・井上さやか)

|| 原則、隔週掲載

秋の野に 咲きたる花を 指折り

かき数ふれば 七種の花

山上 憶良 卷八・一五三七

ません。当時の共通認識などではなく、「秋の七草」という概念も含めて、憶良の創造だったのかもしれない。「指折るかき数ふ」

ことや「七種」の草花など、憶良は数へのご

だわりが強かったようです。中国文学に造詣が深く、数への執心もその影響だと指摘されています。

(県立万葉文化館指導 研究員・井上さやか) 原則、隔週掲載

この歌を読むと、今は亡き祖母に連れられて近くの野山や川べりに出かけ、春にはセリやツクシを摘んで食べ、秋にはハギやススキを摘んでお月見をしたことを思い出します。散歩しながら、セリ・ナスナ・ゴキョウ・ハコベラ・ホトケノザ・スズナ・スズシ

ロと呪文のように「春の七草」を覚えたように思います。「春の七草」は万葉集には登場しませんが、「秋の七草」を詠んだのがこの歌です。「秋の花」尾花葛花、瞿麦の花、女郎花、また藤袴、朝顔の花「(一五三八)」という歌とひと組となってお

やまと 万葉がたり

り、「指を折って数える」様子が眼に浮かびます。ハギ、ススキ、クス、ナデシコ、オミナエシ、フジバカマ、キキョウ、と秋に花を咲かせる7種類の植物名をただ列挙しただけのようにみえますが、

5・7・7・5・7・7のリズムを持つ旋頭歌の形式になっています。尾花とはススキの花 穂のことをいいます。朝顔は、現在のムクゲ かヒルガオのことだとい説もありますが、9世紀末に成立した辞書「新撰字鏡」では、「桔梗」に「阿佐加保」

【訳】秋の野に咲いている花を指を折って数えると、7種類の花が美しい。